

研修報告書No. 4

研修先 高岡郡佐川町立高北国民健康保険病院
四万十町立大正診療所
昭和大学横浜市北部病院 研修医 船古 崇徳

今回、地域医療研修にあたり大学病院では身につくプライマリ・ケアを実践している中小自治体病院での研修を第一に考え、また環境としてより暖かい地域で検索したところ、それに合致した病院で、へき地診療所も備えており、時期に捉われず、暖かいイメージから高知県を選択した。その中でも、私は高北グループに所属し、病床数 98 床を抱える佐川町立高北国民健康保険病院での 1 ヶ月間研修とへき地診療所である四万十町大正診療所の 3 日間研修を行った。

高北病院は、整形外科医 2 名、内科医 5 名、産婦人科医 1 名の計 8 名が常勤しており、外来、病棟業務、訪問診療などを行っていたが、私の指導医は内科医の浦口先生であった。基本的にマンツーマンで病棟業務にあたり、内科全般を先生ご指導のもと、診察を行った。大学病院と比べてやはりご高齢の患者が多く、入院患者でいうと、80 歳以上がほとんどで、60、70 歳台は珍しいほどだった。私が経験した症例は、原因不明の発熱、黄疸、脳腫瘍による意識消失や悪性腫瘍、COPD などの増悪による末期の患者など急性期の疾患から高血圧、糖尿病、高脂血症、腎機能障害で透析中であつたり、気管切開や胃ろうを造設され寝たきりであつた患者など慢性期の疾患まで幅広かつた。大学病院でもこれらの疾患を診ることはあつたが、1 人の医師がジェネラリストとして、これらの疾患の診断治療にあつていく姿は、専門性に特化した大学病院ではなかなか経験できないことで感銘を受けた。また、自宅退院後も地域包括ケアを実践し、介護、医療、予防、住まい、生活支援とさまざまな視点からサポートしていた。具体的には、訪問診療、訪問看護、ケアマネジャーとの自宅訪問などを通じて、退院後のフォロー、例えば、疾患の治療はもちろん、服薬、食事、排泄、リハビリ、バリアフリーの環境の整備など日々の生活に至るまでサポート態勢が整っていた。また、患者訪問時の移動時間も決して短くなく、ケアマネジャーに至っては、最も遠い場所では片道、車で 1 時間弱かかる場合もあつた上、一度に何軒もまわるため、到着してみても患者が不在ということも珍しくなかつた。大学病院では、研修医として急性期疾患の入院患者を診察することが多く、退院後も加療が必要な患者を訪問診療する機会がなかつたが、地域医療を実践してみて、プライマリ・ケアつまり『疾病に対し総合的・継続的・全人的に対応する』とは、時間と労力が要り、とても大変なことであると実感することができた。

また、移動範囲に限られる高齢者のために、黒岩診療所、尾川診療所という出張診療所で月 1 回の診療も行った。ここでは、その地域の患者が一堂に会するため、待合室は常にぎやかで、名前を呼んで返事がないと、側にいる人が「誰々はいる。」と皆、顔見知りのようであつた。ほとんどは高血圧、高脂血症、腰痛などの慢性疾患のフォローであり、内服薬の継続、追加等の指示を行ったが、月 1 回の地域の交流の場としても重要であると感じた。

へき地診療所である大正診療所は、過疎化も進んでいるとのことで、規模は小さかつた

が、やはり外来、病室、訪問診療を行っていた。常勤医は 2 名と少なかったが、上記で示した内容を同様に行っており、ジェネラリストとしてしっかりプライマリ・ケアを実践していると感じた。

患者 1 人を診るのに多くの医療従事者が携わっていることを今回初めて実感した。今後は、都市部での高齢化がますます進んでいくことが予想されるため、今回の体験がより身近に感じられるようになる日も近いと思う。そのために、その中の 1 人として患者さんに最善の医療を尽くし、少しでも患者さんやその地域の幸福度をあげることに貢献していきたい。

最後になりましたが、お世話になった病院関係者の方々、地域の皆様に心より御礼を申し上げます。